

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	長門市立菱海中学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	ICTを活用した家庭・地域とともにある道德科の推進

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1. 研究の背景及び目的

本校は、長門市油谷地区にある全校生徒77名の中学校である。保護者は教育への関心が高く、学校の諸活動やPTAの活動にも協力的である。また、公民館がコーディネーター役となり、学校と地域の「ひと・もの・こと」をつなぐ「油谷地域協育ネット（学校と地域が連携・協働していくネットワーク）」を形成しており、学校への教育活動支援にも大変協力的な地域である。

本研究では、本地域の強みである「油谷地域協育ネット」を活用し、地域の方々が道德科の授業に参加し、生徒と一緒に考え議論する「地域とともにある道德」を実践する。あわせてICTを活用し道德科と家庭教育をつなぐ「家庭とともにある道德」も実践する。これらの実践を通して、生徒の多面的・多角的に考える力を育成し、道德的判断力、心情、実践意欲と態度を育てていきたいと考えている。さらに、本研究を通して、学校・家庭・地域の連携・協働による道德教育を展開することで、“学校を核とした地域づくり”の創出も期待できる。

2. 実施内容

(1) 研究授業 家庭とともにある道德（資料名：尊い玉子）2年生対象：6月実施

通年を通して、学年ごとに「家庭とともにある道德」を進めていくために、2年生を対象に校内研修を実施した。この度の研修会では、生徒たちが道德科の中で議論した内容をタブレットに記録し、家庭に持ち帰り、授業の様子や生徒同士で議論した内容について、保護者とも共有し、保護者の意見や生徒自身の考え、感想等をタブレットに入力し、担任の先生に送信する等の一連の流れや実施する際の留意点等を全教職員で共有した。校内研修後、各学年で随時実施した。



図1 生徒同士による議論



図2 家庭での取り組み方の説明



図3 研究協議

(2) 研究授業 地域とともにある道德（資料名：千年先のふるさとへ）3年生対象：12月実施

指導助言者に近畿大学工学部教育推進センター 教授 松岡敬興先生をお迎えし、広く一般の方々に公開した形での校内研修会を実施した。本年度は、長門市議会議員 文教厚生常任委員会委員、山口県立大津緑洋高等学校の「大津STEAMプロジェクト」の高校生にも参加していただき、中学3年生と一緒に“10年後のふるさと長門”について、考え、議論する道德（地域とともにある道德）を実施した。また、当日は学校運営協議会委員、油谷地域住民、長門市内住民、また、他市からの教職員、県教育委員会、市教育委員会の先生方を含め、総勢約60名の参加があった。研究協議では、「家庭・地域とともにある道德をよりよくしていくためには…」というテーマで熟議を実施した。



図4 大人（高校生含む）との議論



図5 研究協議 熟議

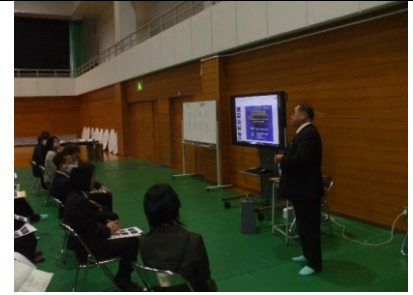


図6 松岡教授による指導助言

(3) 「考え、議論する道徳」の充実に向けた学級活動 全校及び各学年対象：7月・10月・2月実施

「考え、議論する道徳」を充実させるためには、生徒間での自己開示、他者理解等を進めていくことが大切であるという松岡教授のご助言により、年間3回、松岡教授による学級活動を実施した。

1回目は「望ましい人間関係づくり～友達の絵を描いてみよう～」をテーマにした全校学活を実施した。2回目は「表現活動で『思いやり』のかたちを体験してみよう」を各学年で実施した。3回目は、集団の中で育む好ましい人間関係づくりを目指し「チェック・マイ・キャラクター」のエクササイズを各学年で実施した。



図7 全校学活のようす

3. 成果と課題

本研究の成果と課題を把握するために以下のような意識調査を実施した。

まず、年間を通して実施してきた「家庭とともにある道徳」についての意識調査を全校生徒及び保護者に実施した(図8、9)。

「Chromebookを持ち帰り、ご家族と道徳について話をすることで、自分の考えや理解が深まったり、広がったりしたと思う」という質問に対し、生徒の肯定的意見(当てはまる、どちらかといえば当てはまる)は92.9%であった。また、保護者からの肯定的意見も95.2%と共に高い評価であった。

生徒の自由記述からは「家族と道徳について話し合う機会があり、家族の考えを聞いて自分の考えを見つめ直すことができる」「家族の思いを知ることができるよい機会となる」等の意見があった。また、保護者からは「家族での時間も増え、会話も増える」「一緒に考えることでお互いの考えが深められたり、新しい視点が出てきたりすることで、親子ともに視野が広がり、学びの場にもなっていると思う」等、この取組を通して、家族間の対話が促進され、家族で道徳的価値の確認・共有を促す効果が散見された。

「地域とともにある道徳」の意識調査結果(図10)からは、「地域の方々及び高校生と一緒に考える道徳は、自分の考えや理解が深まったり、広がったりしたと思う」という質問に対し、生徒の肯定的意見は93.3%であった。

生徒の自由記述からは「地域の方々や高校生が物事をどのように捉えているかが私達の考えとは違い、新しい物の見方を知ることができた」「ふるさと長門について見つめ直すよい機会となった。また、どのようにして長門を盛り上げ、守って行くかを考えるよいきっかけとなった」等の意見があった。参加した高校生からは「高校生になって身に付けた知識や経験を踏まえて対話することができ、自分自身の成長を感じることができた」さらに、市議会議員の方からは「中学生がしっかりと自分の考えをもち、そして長門の自然や環境を大切に思ってくれていることがよく分かりました」等の意見があった。

これらの調査結果から、この取組が、生徒に物事を広い視野から多面的・多角的に考える力の育成を促すとともに道徳科の授業を通して“ふるさと長門”について考え、議論することで地域愛や郷土愛に関する道徳的心情、実践意欲と態度を促し、“学校を核とした地域づくり”の創出の可能性も伺い知ることができた。しかしながら、こういった内容項目が「家庭とともにある道徳」の効果を高めていくのか、また、「地域とともにある道徳」については、“学校を核とした地域づくり”の創出に向け、この取組をどう家庭及び地域に周知し、共有していくかが課題として明らかとなった。今後も引き続き「ICTを活用した家庭・地域とともにある道徳科」の推進に取り組み、実践・評価・検証していく必要があると考えている。

